北海道医報
ISSN 0913-0217　2025.11.1. 第1286号
発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX(011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp
頒価 1部 275円(税込)

戦後80年を迎えて
―戦後の終わりと新しい戦前―

情報広報部　山科　賢児

１９４５年の敗戦以降、日本は国家として戦争をしておらず、歴史的にも極めて稀である。これは単なる偶然ではなく、この80年間、憲法第９条が「戦争の放棄」と「戦力の不保持」を明記、国民の戦争忌避の感情、特に広島・長崎の原爆体験による強い反戦意識の存在、「戦争をしない」制度と意思の積み重ねが戦争の回避を可能にしてきた。

２０２２年12月、テレビ番組「徹子の部屋」でタモリ氏の「新しい戦前になるんじゃないですかね」の発言が話題となった。ハッとさせられる言葉には、太平洋戦争前後の歴史を踏まえた、現在の日本の社会の不穏な空気を的確に表現している。「新しい戦前」とは戦争そのものではなく、「戦争が起こるかもしれない前触れのような時代」に我々がいるのではないか、という危機感である。

戦争体験者は、その辛さから「戦争の記憶」の多くを語らないが、今の日本は戦前の不穏な社会に似ていると、気づいている。太平洋戦争で戦死した兄を持つ90歳後半の女性は、「世の中の雰囲気は戦前のようだ」と語る。戦前の軍備拡張と重なる動きや、異論を唱えづらくなった日本の社会と、台湾有事の懸念などの国際情勢の不安定さに戦争の前触れのような危うさを感じるのである。

１９４５年日本は敗戦を迎えた。突然の敗戦を知ったときの多くの国民の衝撃と混乱は想像に難くなく、「勝つ戦争」と長年信じてきた人々にとって、敗戦の現実を受け入れる心の動揺は尋常でなかったはずである。しかし意外にも、日本国民は急激な倫理観や正義感の変更を、何の抵抗もなく受け入れた。

戦争が終わったという安堵感と、生活の苦しみから解放される希望もあって、戦後すぐに人々は新しい社会・政治制度に順応し、日本は経済的に急成長を遂げた。しかし憲法や民主主義や教育制度、言論の自由といった戦後の社会・政治改革は、敗戦後、主にＧＨＱの外圧によって急速に導入されたものであり、我々自身が血を流して勝ち取ったものではなかった。

そのため、表面的には制度や体制の刷新が進められたものの、戦前の日本に根ざした価値観や慣行、言い換えれば、同調圧力の強さや責任回避の傾向、政治に対する国民の従属的姿勢、自由や批判精神よりも統制と従順を重視する社会的風土、さらにはメディアの権力に迎合的な構造などは、現在の社会の深層に依然として温存されてしまった。

これらは十分に克服されることなく今に至っており、戦後に築かれた価値観や制度と、それを支えてきた「良識」と「道義性」が失われ、社会と政治は混迷し始めている。政治資金の不透明さや、企業・宗教との癒着が問われる長期政権には、制度疲労や倫理観の低下が見受けられ、戦後の体制が抱える限界を映し出している。

日本は戦後の焼け野原から立ち上がり、工業化と都市化を進め、先進国の仲間入りを果たした。しかしバブル崩壊以降は経済が衰退し、派遣法改正により非正規雇用の急増、中間層の没落、家族制度の希薄化や教育機会の格差が不平等や貧困を生み、努力すれば報われる「昭和的な希望モデル」は機能不全に陥った。若い世代は将来に不安を抱え、社会の分断が進む中で高度経済成長を支えた「戦後の成功モデル」はもはや通用していない。「戦後の終わり」とは過去の清算ではなく、未来の選択を迫る不安定な空気の揺らぎであり、「新しい戦前」が人々の心に影を落としている。

ＮＨＫの朝ドラ「あんぱん」は、作者やなせたかしの人生と創作の背景を描き、放送直後から大きな反響と支持を集めた。彼の反戦思想は「正義はある日を境にひっくり返る」戦争体験から来ており、政策や世論の流れを疑い、自分の目で正義を見極める重要さを作品で表現した。アンパンマンのマーチは「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」と疑問を持ち、考えることの大切さを歌っている。また戦争の足音が近づいてきた時代、１９３７年に書かれた吉野源三郎の名作「君たちはどう生きるか」では、「生きる目的」を問い続け、権威や同調圧力に盲従する危険を批判し、「自分の頭で考えること」「人間らしく生きること」の誇りを、コペル君を通して語った。

これらの問いは、若い世代へのメッセージでありながら、同時に今の我々にも突きつけられている問題である。戦争を遠ざけ、社会の腐敗に抗い、分断を乗り越えるために「何を信じ、どう行動するのか」、その回答が「戦後の終わり」を「新たな戦前」にしないためのヒントとなる。今の時代を次の世代の人たちがどう受け止めるのかは、我々次第である。